

## TOEIC Part 2 におけるシナリオ想起力

田岡 育恵  
情報科学部情報メディア学科  
(2015 年 5 月 30 日受理)

### Scenario-Evoking Ability in TOEIC Part 2

by

Ikue TAOKA

Department of Media Science, Faculty of Information Science and Technology

#### Abstract

In TOEIC Part 2, we are supposed to immediately choose the most appropriate response to a question or a statement. Filling in a blank of a question seems to be easy, but sometimes we respond assuming another question the first speaker will probably have. Inference is involved here. When the utterance of the first speaker is not a question, but a statement, we have to decide what the situation of the conversation is, and choose the appropriate answer according to that situation. In trying to decide what the situation is, not only inference is needed, but we also must have the ability to imagine the possible conversation based on the short utterances of the two speakers involved. Such ability is referred to here as scenario-evoking ability. This paper examines the involvement of scenario-evoking ability in finding the correct answer in TOEIC Part 2.

キーワード; シナリオ, 推論, TOEIC

**Keyword;** scenario, inference, TOEIC

---

## 1. はじめに

TOEIC は, Listening Section と Reading Section で構成され, Listening Section は4つのパート(Part 1, Part 2, Part 3, Part 4)で, Reading Section は3つのパート(Part 5, Part 6, Part 7)で成り立っている. 本稿では, Listening Section の Part 2を取り上げ,そこで必要と思われる推論, 想像力について考察したいと考える.

TOEIC の Part 2 は会話の問題である. 先ず単発の英文が流され, その応答として流される3つの英文から最も適切なものを選ぶというものである.

外国語の理解において, 推論に頼る部分は大きい. 耳にした英語, 目にした英語は必ずしも意味を知っている表現だけで構成されているわけではない. 知らない表現が混じっていることは多いだろう. そのようなときに, その知らない表現の前後に出現している表現の意味から, その表現の意味を推測することになる. Part 2 を解答する際, どのような会話のやり取りなのか分かれば, 知らない表現が使われていたとしても, 明らかに答えになり得ない選択肢を消去していくことから, 正解に辿り着くことはある程度可能だと思われる. 本稿では, Part 2 を解答する際に, その会話がどのようなものになるのかを想像する力について考察する.

なお, Part 2 を解答するための英語力そのもの(単語を知っているかどうか, 構文が分かっているかどうか, 音が聞き取れるかどうか等)については, ここでは考察の対象にはしない.

Part 2 は, 時間を聞かれて時間表現で答えるというようなストレートな問いも多いが, そうではない場合もある. 短い英文が何の文脈もなく与えられるのだから, 解答者はとっさにその文が発せられた状況を想像しなければならない.

発話の情報を文脈に関連づけることが必要であるが, それは, その文脈がいかなるものなのかを決定することであり, その場面を想像する力が求められる. この能力をここでは会話のシナリオ想起力と呼ぶことにする. 話者 A の発話からこのような場面,

即ち, 会話のシナリオが想起され得るので, 話者 B はこのように応答することが十分あり得ると判断して適切な解答を選ぶことになる.

本稿は, 『TOEIC テスト新公式問題集』(Vol.4, Vol.5) の Part 2 の問題として挙げられているものを考察対象とする. Part 2 の問題自体は, 最初の話者の発話の後, (A), (B), (C)と3つの選択肢が聞こえてきて, その中の1つを選ぶことになっているが, ここでは, 最初の話者の発話を A とし, それに対する正解とされる応答を B として示す. なお, 説明のため筆者が加える例についても, 最初の話者の発話を A, その応答を B として示す.

## 2. Part 2 の分析

### 2.1 A に (X) があるタイプ

2.1 節では, 最初の話者 A の発話に埋めるべき(X)があり, その(X)を応答する話者 B が埋めるという場合を見ていく.

先ずは, A の問いに B が直接的に, つまり推論をはさむことなく応じている場合から見ていこう.

(1)では, 「どのジャケットがいいですか」と聞かれ, 「白い方です」と答えている.

(1) A: Which jacket do you prefer?

B: The white one.<sup>1)</sup>

A は, (X jacket)の(X)の部分問い, B は(X)の値を決定している. (2)~(4)も, (1)と同じタイプである.

(2) A: Where can I catch a bus to Rome?

B: At the west terminal<sup>2)</sup>

(3) A: How often do you visit your family?

B: Twice a year.<sup>3)</sup>

(4) A: Whose coffee cup is that?

B: I think it's Maria's.<sup>4)</sup>

(2)では, 場所(X)を聞かれて, 「西ターミナル」と

いう場所が答えで示され、(3)では、回数(X)を聞かれて、その回数「年2回」が答えである。(4)は、「誰(X)のコーヒーカップですか」と聞かれて、「Mariaのものだと思います」と答えている。

(1)~(4)は、すべて Wh 疑問文であるが、Yes/No 疑問文でも、(5)のように「後であなたに電話をかけ直してもよいですか」と聞かれて、sure と答えるのもストレートな応答である。Yes/No 疑問文の(X)とは、Aの発話についての Yes or No を決定することである。

(5) A: Can I call you back later?

B: Sure, try my mobile number.<sup>5)</sup>

他方、Aの問う(X)が間接的に埋め込まれている場合もある。

(6) A: Have you looked over the expense reports I gave you?

B: I'll get to it this afternoon.<sup>6)</sup>

(6)は、「私が渡した経費報告書に目を通しましたか」という問いに対して No と答える代わりに、「今日の午後に取りかかります」と答えている。今日の午後に取りかかるということは、まだしていないということになり、Aが尋ねている(X<sup>1</sup>)の答えは No ということである。しかし、No の場合、BはAの抱く「それなら、いつ(X<sup>2</sup>)するのか」という次の問いを先取りして、その先取りしたAの問いの(X<sup>2</sup>)に対して「今日の午後」を答えとしているのである。「今日の午後に取り掛かる」ということは「まだしていない」ということであるが、その場合、相手は「いつできるのか」を知りたがるだろうと推論が働き、Bの応答となる。

(7) A: Haven't we received the architect's plan yet?

B: I'll check with Mary.<sup>7)</sup>

(7)において、「建築家の設計図をまだ受け取っていないのですか」というAの(X<sup>1</sup>)に対して、Yes or No で答えるのではなく、Bの応答は「Maryに確認します」となっている。この場合も、答えが No の場合、次にAが聞くだろう「ならば、どうする(X<sup>2</sup>)のか」を先取りした応答になっていると言えよう。

(8)では、Aの(X<sup>1</sup>)は Yes であるが、相手が次に聞いてくる「その荷物はどれ(X<sup>2</sup>)か」を先取りした応答をBがしている。

(8) A: Are you bringing any luggage with you on the plane?

B: Just this suitcase.<sup>8)</sup>

(8)では、「機内に手荷物を持ち込みますか」と聞かれ、「はい、あります」ではなく、「このスーツケースだけです」と答えている。これは、「(あります。)このスーツケースだけです」ということである。問いは Yes/No 疑問文であるが、この答えとして Yes と答えるだけでは不適切な応答になる。それは、(9)のように「塩を取ってくれますか」と言われたときには、実際に塩を相手に渡すことが適切な応対であり、B1のように Yes, I will. と答えるだけでは不適切であるというのと同様である。(9)の文脈では、寧ろB2のような応答が適切なものとなる。

(9) A: Will you pass me the salt?

\*B1: Yes, I will.

B2: (passing the salt) Here you are.

(8)に戻って、手荷物があるのなら、それが何かを言わなければならない。TOEICの解答者が飛行機の搭乗前の手荷物預かり手順を経験している場合、容易にその状況を思い起こし、Bの応答はすぐに理解できるものだろう。経験は状況の理解に大きな助けになる。(10)も同様の例である。

(10) A: Could you lend me your dictionary?

B: It's over there on the shelf.<sup>9)</sup>

A の「辞書を貸していただけますか」に対し、B は「あちらの棚の上にあります」と、辞書のある場所を教え、それによって「辞書を使ってよい」という Yes を間接的に伝えている。単に Yes と答えるより、具体的に辞書の在り処を示す方がより適切な応答になる。Yes の場合、次に来るのは辞書の場所についての問いになるからである。

(11) A: You put the stamps in the top drawer, didn't you?

B: Actually, I just used the last one.<sup>10)</sup>

(11)では、A の「あなたは一番上の引き出しに切手を入れたのですよね」に、一見、(X)の部分はない。A は切手のある場所を「一番上の引き出し」と既に特定している。しかし、A は B にその確認を求めているわけで、B は「切手のある場所は引き出しか」について、その Yes or No(X<sup>1</sup>)を決めなければならない。B は、「実は、私が最後の一枚をさっき使いました」と答え、したがって「切手はもう一番上の引き出しにはない」と、(X<sup>1</sup>)に間接的に No で答えていることになる。答えは No なのだが、それなら、一番上の引き出しに切手を入れたと思っていた A が次に抱くだろう問い「切手は、どうなった(X<sup>2</sup>)のか」を B は先取りして、その答えを返事としている。

(6)-(11)の例では、B の側で A の発話を元にした推論が働いている。B は、個々の場合において A が、その発した発話によって何を求めている状況なのかを判断し、その状況に応じた適切な答えを与えている。

## 2.2 A に (X) がないタイプ

この節では、A に満たすべき (X) がないタイプについて見ていく。

次の 2 例では、A が「問い」ではないことに注目

したい。

(12) A: The mail just came.

B: Is there anything for me?<sup>11)</sup>

(13) A: The awards committee had a really hard time choosing this year's recipients.

B: Have they announced the winners yet?<sup>12)</sup>

(12)では、A の「郵便が今、来たところです」に (X)の部分はない。それに対して、B が「私宛のものがありますか」という質問をしている。

(13)では、A の「選考委員会では今年の受賞者を選ぶのに非常に苦労しました」に対して、B は「受賞者の発表はもうありましたか」と聞いている。

(12)、(13)では、A の「郵便」、「受賞者」から更に会話を進めるべく B の応答が続いている。これらにおいては、A の発話に対し、それに関連する質問をすることが B の適切なコミュニケーション能力ということになる。A の発話を元に B が A は何を求めているのかを推測するというのは、2.1 節の例と同じである。

しかし、A の求める (X) を B が決めなければならない 2.1 節の例とは異なり、シナリオの構築は B に委ねられている。(12)なら、(14)のように「今日の郵便は遅かったですね」というような応答もあり得るし、(13)なら、(15)のように「今年は候補者が多かったです」というような応答をすることは考えられるだろう。他にも B の応答は無数に考えられる。

(14) It was late today.

(15) There were many candidates this year.

いずれにせよ、B は A の発話に関連する何らかのことを言って、会話を構築していく。その際に、A がこう言ったら、ふつう B はこのように応答するものだという、言わばステレオタイプの応答が考えられる場合がある。簡単な例で言えば、たとえば、

他人から何かして貰った場合に「有難う」と言うというパターンである。このような状況ではこういうものだという無標の発話行為の型というものがある。もちろん、その場合も、無標の応答が「有難う」ということで、状況に応じてそうならない場合は、多々あり得る。

(16) A: Sue Minto will be your training coordinator.

B: I look forward to meeting her.<sup>13)</sup>

「Sue Minto があなたの研修のまとめ役になります」と聞かされて、「彼女に会うことを楽しみにしています」と応じている。「Sue Minto があなたの研修のまとめ役になります」の部分に満たすべき(X)はないので、A の発話は何らかの情報の補足を求めているものではない。B は、ただ聞いているというサインで相槌を打つだけでも構わないと思われる。しかし、B は人を紹介されときの礼儀としての常套的とも言えるような応答をしている。B が子供なら、このような応答ができるかどうか、恐らくできないのではないか。対人関係に留意して、あるべきシナリオを想起できるかどうか適切な応答につながると言えよう。もちろん、B が、Sue Minto が研修のまとめ役であることが不服であり、それを表明するというような場合は、それはそれで妥当なコミュニケーションである。B の応答の可能性は、他にも多々考えられるが、1つのパターンとして(16B)のように応答することは十分妥当と考えられるということである。

次の例も、対人関係に留意したシナリオを想起できるかどうかポイントである。

(17) A: Please make sure to enter your hours on this form.

B: Thanks for reminding us.<sup>14)</sup>

(17)では、A の「この用紙にあなたの勤務時間を必ず記入してください」に対して、B は、その言語

内容そのものについてではなく、そのことについて注意を喚起してくれた行為に対して礼を述べている。A に満たすべき(X)はないが、言わば対人関係シナリオに基づき、相手の注意に対して礼を述べるのがこの場合の適切な応答となるという判断である。

(18) A: I've ordered lunch from the caterer that Tom recommended.

B: I'm sure it will be delicious.<sup>15)</sup>

(18)では、A が「トムが推薦した仕出し屋に昼食を注文しました」と言ったのに対して、B はA がその昼食に期待しているだろうと察し、「きっとおいしいでしょね」と応じている。ここでも、埋めるべき(X)はないが、A の発言に対し、対人関係に留意した1つのシナリオに基づいてB は応じている。

### 3. 文脈決定の際のAとBの相互作用

この節では、会話の状況はAとBのそれぞれの発話の相互作用で決定されるということを述べる。

(19), (20)においても、Aに(X)の部分はない。したがって、Bの応答は(X)の値を埋めることに束縛されるものではない。

(19) A: There are a lot of cardboard boxes in the lobby.

B: Don't worry, they'll be picked up soon.<sup>16)</sup>

(20) A: There aren't enough seats for everyone.

B: I'll get some extra chairs.<sup>17)</sup>

(19)のA「ロビーには、段ボール箱がたくさんあります」というのは、段ボール箱があるので困るという発言だと解釈されて、B「ご心配なく。すぐに片付きます」という応答になる。AとBの発話が相互に働きかけて、目の前の問題(段ボール箱)を解決しなければならないというシナリオが想起され、Bの「すぐ片づける」という応答が理解されるのである。もしA、Bが段ボール箱に何ら責任を負わない

設定なら、そのようなシナリオは想起されない。Bの応答は、たとえば、(21)のように、「箱の中身は何ですか」でもいいわけである。

(21) What is in the boxes?

(20)のA「全員分の座席がありません」についても、A、Bが関わる椅子についての、言わば問題解決シナリオが想起されて適切な応答となる。これが、グループで喫茶店にでも入ろうという状況なら、Bのような応答は考えられない。その場合なら、たとえば、(22)「他の店に行こう」というような応答が適切ということも考えられる。

(22) Let's try another one nearby.

(20)では、Aの「席が足りない」を、ここでは、これは足りない席の問題を解決せよというAの指示と解釈して、Bの「私が余りの椅子を持ってきましたよう」が適切な応答になるのである。

ここで注目したいことは、(19)、(20)のそれぞれAの「段ボール箱がある」、「席が足りない」という発話それ自体は、実はいくつもの状況を想起させ得るということである。それが、選択肢の1つとしてBの応答を聞いたときに、問題解決シナリオが想起され、「段ボール箱を処理しないといけない状況」、「椅子を取ってこないといけない状況」に決まる。Aの発話は、単なる状況認識を表したものではなく、特定の事態(問題の状況)を解決せよという、Bに対する指示として再解釈される。これは、Aの発話、Bの発話が相互作用して文脈が決定されるということである。(23)においても、同様のことは当てはまる。

(23) A: I'm here to pick up some theater tickets.

B: Your name, please.<sup>18)</sup>

(23)のA「劇場のチケットを受け取りに来ました」

に対しては、劇場ではプロトタイプのどのような行為がなされるのかという劇場シナリオが活性化されて、B「お名前をお願いします」が理解されるのである。もしBが劇場窓口の人ではなく、Aの友人で、その二人が偶然、劇場窓口で会ったとすれば、Bのような応答は逆に不適切となり、たとえば、(24)のような応答が考えられるということになるだろう。

(24) A: I'm here to pick up some theater tickets.

B: Me, too.

つまり、Aの発話は様々な状況を想起させ得るのだが、(23)では、Bの「お名前をお願いします」を聞いて初めて、チケットを窓口に取りに来たという文脈が決定され、Aの発話はBに対して「チケットを渡すように要求している」と解釈されることになる。

最後に、会話の状況はA、Bの発話の相互作用で決まると述べたが、これはPart 2の文脈決定におけるものであることを確認しておきたい。

Part 2では、解答者は文脈についての先行認識を何ら持たず、いきなり耳にする短い1つの英文と、その応答の選択肢として短い英語の応答が3つ示される。文脈決定は、解答者にゆだねられる。他方、実際の発話では、たいていの場合、BはAの発話の前提を理解しているものとしてAは発話し、BはAの前提とする状況を多様な可能性の中から選び出す必要はない。文脈が発話Aと発話Bの相互作用を経て、つまり両方を見て決まることになるというのは、発話の文脈を知らないPart 2の解答者にとってのことである。このようなことが実際の会話の状況で起こるとすれば、A、Bについてよく知らない人がAとBのやり取りを傍で聞いていたときにそうなると思われる。また、AとBがある程度話の前提を共有している場合でも、A、Bの間で何らかの前提の齟齬があれば、相手の発話を元にそれが露呈し、それを解消する方向で会話のシナリオが構築されていく

だろう。

#### 4. おわりに

TOEIC の Part 2 の問題では、文脈が前以て与えられていない状況で妥当な応答を選ぶことができるかどうか問われる。その際、その断片的な言語情報から、その応答はどのようなものになるべきなのかを判断しなければならない。

相手が何を求めているのかを判断するには、相手の文字通りの発話から推論を経て、相手の意図を汲むことが必要である。言語情報を元にあるべき会話を構築する力も必要である。その場に合う会話の形を思い起こし、この場合はどのような応答が適切なものとして考えられるのかを決める能力が求められる。本稿では、そのような能力を会話のシナリオ想起力と考えた。

TOEIC Part 2 で解答者が判断する会話のシナリオは、A の言ったことだけで決定されるものではなく、B の応答の選択肢を聞いて、その A, B のやり取り全体として妥当なものに決定される。A, B の瞬時のやり取りから、1 つの場面のシナリオを想起できるかどうか鍵である。

#### 5. 注

- 1) 『TOEIC テスト新公式問題集』 Vol. 5, 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会. 2012 年.
- 2) 上掲 1) に同じ.
- 3) 上掲 1) に同じ.
- 4) 上掲 1) に同じ.
- 5) 上掲 1) に同じ.
- 6) 上掲 1) に同じ.
- 7) 『TOEIC テスト新公式問題集』 Vol. 4, 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会. 2009 年.
- 8) 上掲 1) に同じ.
- 9) 上掲 7) に同じ.

- 10) 上掲 1) に同じ.
- 11) 上掲 7) に同じ.
- 12) 上掲 7) に同じ.
- 13) 上掲 1) に同じ.
- 14) 上掲 1) に同じ.
- 15) 上掲 1) に同じ.
- 16) 上掲 1) に同じ.
- 17) 上掲 7) に同じ.
- 18) 上掲 7) に同じ.